



2013年9月22日(日) システィーナ礼拝堂 500年祭記念「ミケランジェロ展—天才の軌跡」

(国立西洋美術館) へ行ってまいりました。正確には天井画製作から 500 年ということで、「最後の審判」製作はその後の事です。それにしても壁画は取り外し不能だし、何が来るのかと思っていましたが、今回の展覧会はミケランジェロが購入した家「カーザ・ブオナローティ」(Casa Buonarroti) からやってきたものでした。ミケランジェロは 13 世紀からフィレンツェで行政官を務めた家柄に生まれたことを誇りに思っていました。システィーナ礼拝堂の完成された作品群も素晴らしいのですが、本展ではその製作のためのデッサンや、設計だけで実現しなかった建造物の設計図などが見られます。むしろ普段スポットが当たらない部分なので、珍しいかもしれません。展覧会は 11 月 17 日まで。

※ ゲーテの賛美

ゲーテは『イタリア紀行』(英語刊行)において「システィーナ礼拝堂を見ずに、ひとりの人間が成し得る偉業を見ることはできない」とミケランジェロ・ブオナローティの業績を称えています。

※ ミケランジェロ (Michelangelo Buonarroti 1475.3.6~1564.2.18) の目指したもの

「彫刻に近づくほど絵画は美しい」「人間の肉体こそ神の最高の創造物である」—ミケランジェロは古代ギリシャの彫刻家ミュロンの『円盤を投げる人』に見られるようなヴォリュームのある身体彫刻的絵画を目指しました。そして『最後の審判』でそのマニエリズモ(Manierismo)= {語源: maniera マニエラ(手法)} = 「引き伸ばされた人体表現」を生み出します。ところが「真実を語るものは真に美しい裸体である」—そうして描いた裸体画に要人が「着衣させよ」と命令を下し、他の画家が着衣させました。ミケランジェロはその要人に蛇を巻きつけて画面に表し、自らを人間の皮として描いています。また『最後の審判』による数枚の銅版画がジョルジョ・ギージ(Giorgio Ghisi)の手によって残されました。ルネサンス盛期とバロック期の中間のミケランジェロのマニエリズモがいかに人気が高かったかがわかります。

※ 製作の軌跡

30代で天井画を描き、60代で『最後の審判』を依頼されたとき、ミケランジェロはすでにその壁面に描かれていたペルージの『聖母被昇天』を残そうとしましたが、クレメンス7世に却下されました。また、室を隣り合せてレオナルド・ダ・ヴィンチと同時に依頼された「カッシアの戦い」は、契約を破棄したために実現に至りませんでした。その他、設計だけで終わり建築が実現しなかったチャペル、資金や材料が得られず実現しなかった彫刻、それらの構想案だけがデッサンとして残っています。

※ ミケランジェロと詩

意外と知られていませんが、ミケランジェロは多くの詩を残しています。ローマの青年貴族トンマーゾ・デイ・カヴァリエーリ(Tommaso dei Cavalieri)に出会い、その美しさを賛美した詩を書きましたが、当時は同性愛を疑われることがスキャンダル。ミケランジェロは同性愛を疑われたことへの反抗を「不滅への願望(If the desire of the Immortal...)」という詩に残しています。

I

II

III

IV



(購入絵葉書より)

- I レダのデッサン。当時は女性像を描くにも男性をモデルとしたため、これも弟子がモデルになった。
- II 1490年頃の浮彫。ルネサンス彫刻の創始者ドナテッロ(Donatello)が得意とした極薄肉浮彫=スティアッチャート(stiacciato)を真似したように言われているが、すでにミケランジェロは力強い身体表現法を身に付けていた。
- III彼のデッサンの中で最高の評価を得ているクレオパトラ。静謐なこの絵の裏側には、苦悩の表情のクレオパトラを描いた絵が対比的に展示されている。
- IV食にこだわらず贅沢をしないミケランジェロがキリスト教の慣習に則したと言われる珍しいメニュー・メモ。「パン2個、ワイン1瓶、ニシン1匹、トルテッリ(詰め物をしたパスタ)」「サラダ1皿、パン4個、トンドのワイン1瓶、辛口ワイン1/4瓶、ホウレン草1皿、イワシ4匹、トルテッリ」「パン6個、ウイキョウのスープ2皿、ニシン1匹、トンドのワイン1瓶」